

2019 年度 きのさき見て歩き 第3回

「城崎だんじり祭り」

実施日 2019年10月15日(火) 10:00~15:00

講師 坂田 文一郎氏 (城崎文化協会会長)

今回のテーマは「城崎だんじり祭り」です。

城崎の守護神を祀る「四所神社」の秋まつりであり、毎年10月14日(宵宮)と15日(本宮)に行われます。この2日間は城崎にとって特別であり、イベントとして発展したものではなく町の人たちが楽しむためのまつりとして今に受け継がれています。この日は町中がまつりに参加するため、学校も仕事も休みとなり、城崎出身の都会に住む人も帰ってきます。

●まつりの歴史

神輿が寄付された享保9年(1724)から、次々と神輿太鼓、大だんじりが作られます。祭事は明和2年(1764)9月9日にはじまりましたが、明治初期の太陽暦に伴い10月9日に、円山川の川内協議によって現在の10月15日になりました。

●まつりの運営組織

運営組織は、四所神社を境に大溪川の上流を「上(かみ)部」、概ね一の湯までを「中(なか)部」、それから下流を「下(しも)部」に分けています。上部は神輿太鼓、中下部は大だんじりを管理し、上下それぞれに小だんじりがあります。まつり当日はそこに四所神社の神輿を交えた計5基が町中を走り回ります。

まつりの見どころは、このだんじり同士の競り合い「セリ」です。

今回の見て歩きでは、迫力ある三か所の「セリ」が見られる本宮を見に行きました。



四所神社の神輿

当日の様子

〈宮入〉11:50

祭りに登場する5基のだんじりが順に四所神社に宮入します。神輿は神社の境内の上段に構え、ほかの4基の宮入を待ちます。まず神輿太鼓が鳥居を通過して宮入し、神輿の隣に並びます。神輿太鼓には鳥居をくぐり、神輿と同じ境内の上段に上られる特権があります。

5基の運営するのは15~50歳の城崎の男衆たちです。

年齢ごとにそれぞれの階級と役割があり、衣装も違います。事前に調べ当日見比べてみるのもまつりの楽しみ方の一つでしょう。



鳥居をくぐって宮入する神輿太鼓

次に小だんじりが宮入します。小だんじりに乗れるのは小学1年生未満の子どもです。小だんじりは鳥居をくぐれないので、鳥居の横を通って宮入します。

最後に大だんじりが宮入します。大だんじりに乗れるのは大警護という最も高い階級の男衆で、中、下部より1人ずつ選出されます。小だんじりと同様鳥居の横を通って宮入し、境内の上段に登ろうと神輿太鼓と競り合います。

宮入はまつりの始まりを肌で感じることができる、圧巻の光景でした。

だんじりにはそれぞれに宮入の特徴があります。事前に特徴をおさえておくことで一層まつりを楽しむことができると思います。



鳥居の横を通って宮入する小だんじり



大だんじり(境内の上段に入ろうとする)



〈執頭宿〉

上部、中部、下部それぞれに設置されている執頭のための宿です。各部の組織を運営する中心的な役割を執行するための階級で3～4年ほど務めます。



まんだら橋せり

〈まんだら橋セリ〉 12:30

セリとは神輿にお供するする神輿太鼓と、神輿の渡御の仲間に入りたい大だんじりの競り合いのことを言います。喧嘩だんじりとは違い一つの形をどのように演じるかが醍醐味となります。

まんだら湯は温泉の起源となる聖地なので、大だんじりは橋の中央から聖地へは入れません。まんだら橋では無理矢理聖地へ入ろうとする大だんじりと、押し返す神輿太鼓のセリが行われます。



地藏湯橋せり

〈地藏湯橋セリ〉 15:00

地藏湯橋は南側が高い造りになっています。大だんじりは橋の北側の低い場所から神輿太鼓のいる高い場所へ上がろうとします。

そのため地藏湯橋は地形を利用したセリの様子がよく分かる見所のスポットとなっています。



王橋三つ巴のせり

〈王橋（一の湯前）セリ〉 4:30

これを見ないとまつりに来た意味がないといわれるほどの一番の見所です。神社に帰ろうとする神輿、神輿にお供する神輿太鼓、帰らせまいとする大だんじりが、町の中心、一の湯前で三つ巴のせりを見せます。

たいへん迫力があり、秋の肌寒さを忘れて魅入ってしまいました。夕方の遅い時間帯からのセリですが、来られた方はぜひ見て帰ってほしいです。